

平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡

—東三条殿—

2009年

古代文化調査会

平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡

—東三条殿—

2009年

古代文化調査会

例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区中之町 51 他において、株式会社ダイマルヤによるマンション建設に伴い実施した平安京左京三条三坊二町・烏丸御池跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は株式会社ダイマルヤより委託を受けた古代文化調査会の上村憲章が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集は上村がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、上村が分担し、遺物の実測は板谷桃代、上垣雅子、須貝淑恵、水谷明子がおこない、製図は上村が担当した。
6. 本書の執筆は上村が行った。
7. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値は m 単位で、水準は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の 2500 分の 1 の地図（御所・聚楽廻・三条大橋・壬生）を調整し、使用した。
9. 土壌の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
10. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太 石田恵一 宇野隆志 馬瀬智光 岡田直己 岡田文男 梶川敏夫
加藤 茂 北崎仁志 北田栄造 白井大輔 杉浦慎吾 玉村登志夫 中島崇徳
西森正晃 西山良平 長谷川行孝 堀 大輔 宮原健吾 森田一道 森田一徳
八木匡夫 山本雅和
(株)明輝建設 (株)大高建設 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (有)京都編集工房
(株)ダイマルヤ (株)東洋設計事務所

本文目次

平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡 一東三条殿一

I 調査の経緯	I
II 調査の経過	1
III 遺構	3
IV 遺物	6
V 小結	13

図版目次

図版1	遺跡 第1面遺構実測図
図版2	遺跡 第2面遺構実測図
図版3	遺跡 第3面遺構実測図
図版4	遺跡 1 調査地近景（南西から） 2 第1面全景（南西から）
図版5	遺跡 1 第2面全景（南西から） 2 第3面全景（南西から）
図版6	遺跡 1 土壙133（南から） 2 柱穴31・33・138（南東から） 3 堀32セクション（南西から） 4 井戸2（西から） 5 井戸10（南から） 6 井戸49（南から） 7 井戸63（東から） 8 井戸65（南から）
図版7	遺物 土壙133・堀32・土壙47出土遺物
図版8	遺物 井戸10・井戸2・井戸49出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	1
図 2	平安京条坊と調査地位置図	2
図 3	四行八門と調査位置関係図	2
図 4	断面実測図	4
図 5	堀 32 断面実測図	5
図 6	井戸 2 実測図	5
図 7	土壤 133 出土土器実測図	7
図 8	堀 32 出土土器実測図	7
図 9	土壤 47 出土土器実測図	7
図 10	井戸 10 出土土器実測図	9
図 11	井戸 2 出土土器実測図	10
図 12	井戸 49 出土土器実測図	10
図 13	出土錢貨拓影	12
図 14	土壤 47 出土磬写真・断面実測図	12
図 15	出土軒瓦拓影・実測図	12

平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡

—東三条殿跡—

I. 調査の経緯

調査地は京都市中京区中之町 51 他である。当該地は周知の遺跡・平安京跡の左京三条三坊二町の南東部、調査トレンチは西四行北七門の東半部にあたる。また、弥生時代から古墳時代の遺物が出土する烏丸御池遺跡に含まれるところである。2009 年、当地に株式会社ダイマルヤによってマンション建設の計画がなされた。試掘調査の結果、かなり搅乱されている部分はあったが、室町時代の「構」の一部と見られる堀の存在なども確認されたため発掘調査を行うこととなった。発掘調査においては、京都市の指導のもと施主との三者協議の結果、当調査会が 2009 年 7 月 6 日より発掘調査をおこなうこととなった。

II. 調査の経過

平安京左京三条三坊二町にあたるこの地は、北が押小路に、西が西洞院大路、東が町尻小路、南が三条坊門小路に囲まれたところである。同坊一町には藤原北家の本邸として知られる東三条

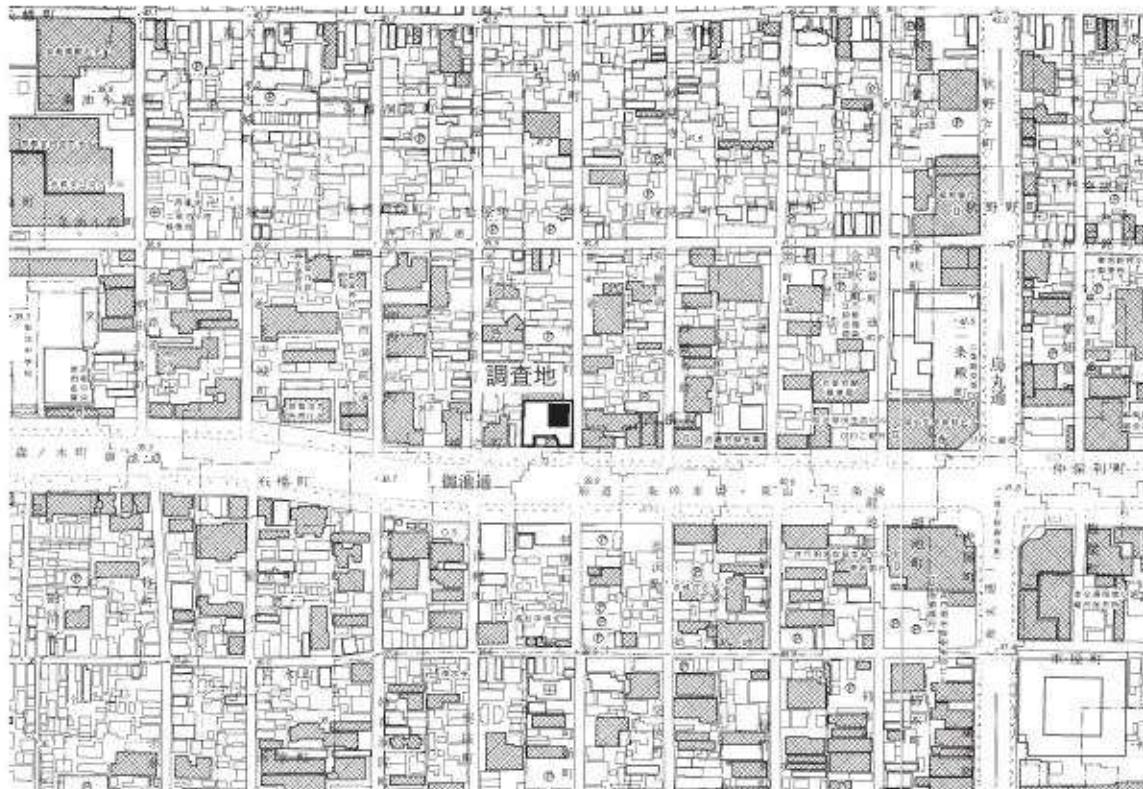


図 1 調査地位置図 (1/5,000)

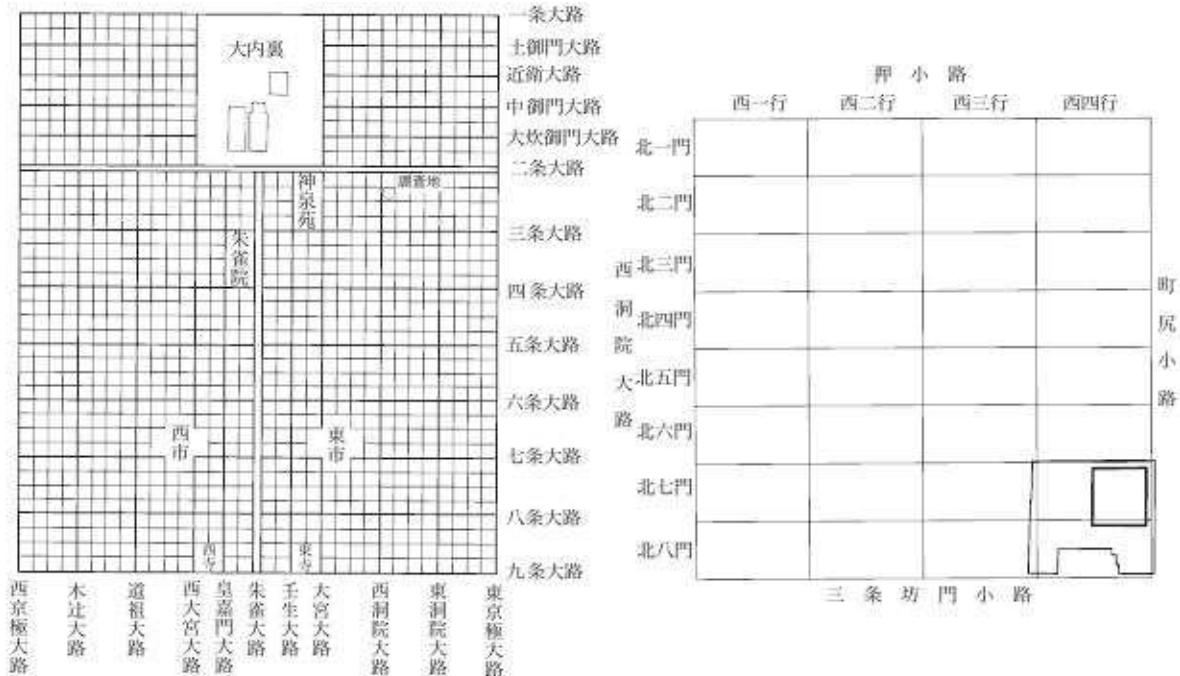


図2 平安京条坊と調査地位置図

図3 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

殿が存在し、藤原兼家の時代に南の二町を東三条殿南院とした。藤原頼通の時には南北二町の東三条殿が成立したとされる。

また、室町時代には当町の東隣に「妙覚寺」、西洞院大路を挟んだ西隣には「妙顯寺」が存在した。両寺とも16世紀前半頃には京内の法華21ヶ寺として勢力を誇った寺院である。天文5(1536)年、「天文法華の乱」で下京区域とともに焼失、「妙覺寺」は1548年には再建され、天正10(1582)年、「本能寺の変」の時に織田信忠が滞在していたために明智勢によって再び焼失した。西隣の「妙顯寺」は天文11(1542)年に帰洛を許され再建、後に「妙顯寺城」となり豊臣秀吉の居城として聚楽第が完成するまで利用されることとなる。

調査は平成21年7月6日から同年9月1日までの間、実働37日間を要した。調査面積は221m²であったが、遺構面は3面あり、実際の調査面積は延べ663m²となった。

なお、調査の方法としては、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、4mメッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。左京三条三坊二町の築地四隅の座標値(新測地系)は以下の通りである。

北西 X=-109,567.94m Y=-22,339.81m	北東 X=-109,567.45m Y=-22,220.42m
南西 X=-109,687.32m Y=-22,339.32m	南東 X=-109,686.84m Y=-22,219.93m

III. 遺構

現表土下 1.2m 程で遺構面に達する。室町後期と思われる整地層が一部に認められるが、ほとんどは江戸時代以降の堆積土層と考えられる。洪水に伴うものと見られる砂礫層、あるいは火災に伴う焼土を含む整地層などがほとんどである。地勢的には北東から南西に向いわずかに下っていく状態であり、遺構面も同様である。

平安時代

調査区の東部を中心に平安時代の遺物を含む遺構が若干認められた。

井戸 134 (図版3・5の2)

調査区の南東の隅で掘形の一部を検出、9世紀後半代の土器類が少量出土した。調査区南壁沿いに方形木枠の痕跡を検出し井戸であることが判明した。

土壙 133 (図版3・5の2・6の1)

調査区南東部で検出。形状は土壙としたが不整形で、地山上の自然の凹凸をならすために入れられた土である。東西 4.5 m 以上、南北 1.8 m、最も深いところで 0.4m を測る。10YR4/2 灰黄褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色の泥砂層が堆積し 10世紀代の土器類が出土した。

土壙 107 (図版3・5の2)

調査区の東壁沿いに検出。平安後期の遺物が出土する。町尻小路の西側築地の推定位置から見ると邸宅の内溝である可能性が高い。

柱穴 (図版3・5の2・6の2)

北東部で検出している柱穴 31 や 33、南東部では柱穴 69 など 10世紀代の遺物を含むものを検出している。しかし並びが確認できるものはない。

鎌倉～室町時代

確実に鎌倉時代に比定できる遺構は確認できなかった。室町時代前期の遺構も同様である。出土遺物も全体的に見てもこの時期のものは少なく、こうした状況からみてもこれらの時代にはほとんど動きがなかったものと見られる。

堀 32 (図版2・5の1・6の3、図5)

調査区北東部から南西方向に掘られた比較的規模の大きな堀を検出した。幅 3.7m、深さは検出面から 2.15m を測る。8 層とした土層は細い砂が主体であり堀が機能していた時点で堆積したものである。これより上層は一気に埋め戻された土層と見られる。堆積土からは 16世紀代の土器類が出土、埋没時期は 16世紀代中頃と考えられる。

土壙 47 (図版2・5の1)

調査区北部で検出、南北 1.3m、東西 2.3m、深さ検出面より 1.0m を測り南東部でやや東にふくらむ長方形のプランを呈す。堆積土は 10YR4/2 灰黄褐色泥砂が主体で、焼土等が混入する。

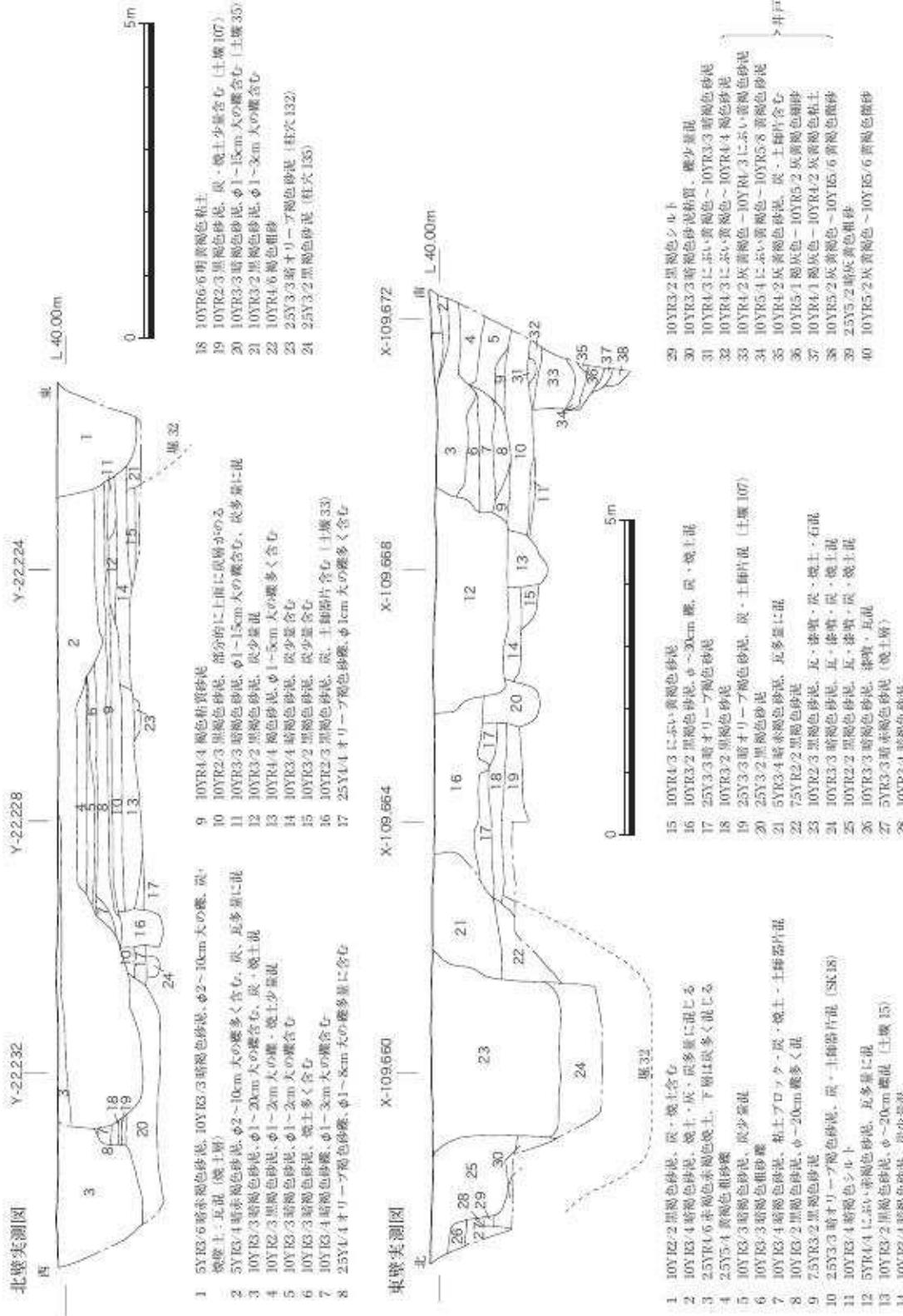


图 4 断面实测图 (1/100)

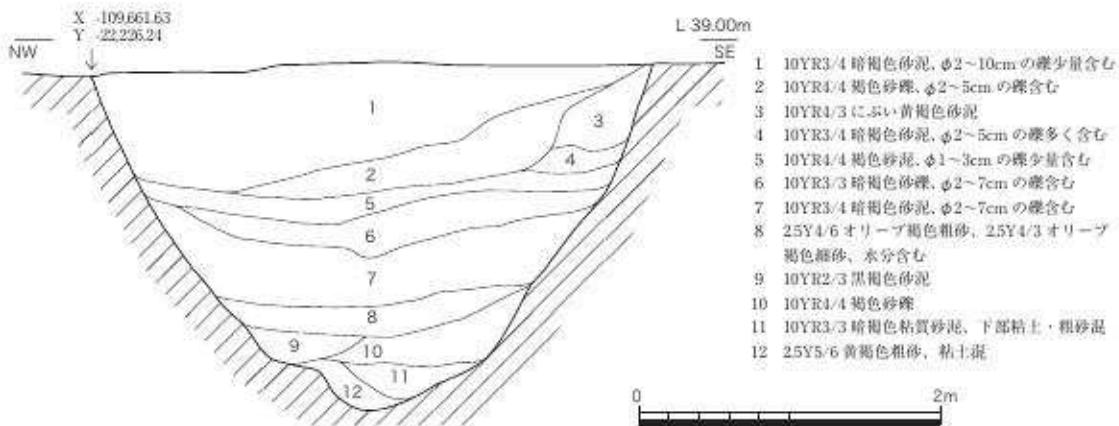


図5 堀32断面実測図 (1/50)

この土壤からも16世紀中頃の遺物が出土。また完形品の銅磬も出土していて注目される。

桃山時代～江戸時代以降

桃山時代から江戸時代にかけての遺構は井戸、土壙など多数確認できる。江戸時代以降は火災による焼土や焼瓦を処理した大型の遺構が目立つ。

井戸10(図版1・4の2・6の5)

井戸1に切られており、検出面から1.9m前後で川原石を用いた円形の石組1段分を確認したが、遺存状況は不良であった。内径は0.6～0.7mを測る。底部は石組からさらに0.7～0.8mの深さにあり標高は35.70mである。桶などが設置されていたと見られるが痕跡は未確認である。埋土は10YR3/2 黒褐色泥砂等が中心で焼土、上層部では径20～30cm大の石が投棄されている状況が認められた。

井戸2(図版1・4の2・6の4、図6)

堀32を切って成立しており、石組は川原石を用いて円形に組まれ、底部より6段前後が残存していた。石組の内径は0.9m前後を測る。底部の標高は35.95cmである。

井戸49(図版1・4の2・6の6)

調査区南部で検出。径1.45mを測り、底部の標高は36.0mであった。井筒等の施設は確認できず、廃棄の際には撤去されたものと思われる。

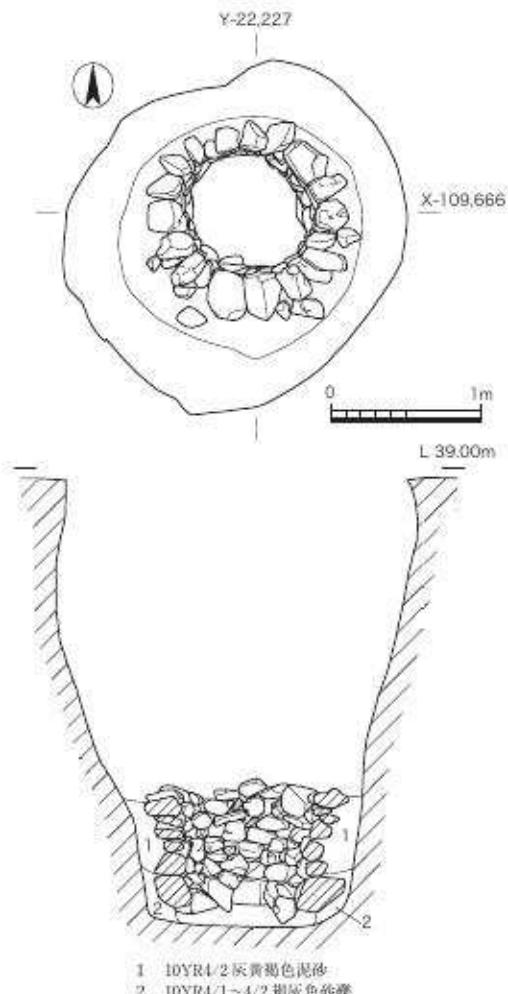


図6 井戸2実測図 (1/50)

井戸 63（図版1・4の2・6の7）

調査区中央西部にあり井戸4に切られている。成立面は上部が新しい遺構に切られているために不明であるが、掘形の径は1.3m程で、底部の標高は35.65mである。底部付近で円形の石組1段分を検出した。石は川原石、花崗岩の切り石などを用いて上面が平坦になるように設置されていた。石組上面の標高は35.96m程である。断面の観察によってこの上に径0.6mほどの桶状の木枠が設置されていた模様であるが残存状況不良のためそれ以上の詳細は不明である。堆積土は井筒内が2.5Y3/2黒褐色砂泥、掘形には2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂、10YR4/4褐色泥土等が堆積していた。18世紀前半から半ばくらいの土器類が出土している。

井戸 65（図版1・4の2・6の8）

調査区北東部で検出。掘形の径は1.6～1.9mあり、検出面より1.9m程のところで花崗岩の切り石を用いた石組が一段分残存していた。この石組の下には桶状の木枠が設置されていた痕跡が確認でき、底部の標高は35.6mを測る。底部には径25～35cmの花崗岩が1個確認された。堆積土は10YR3/2黒褐色の泥砂が主体で、焼土が多く混じる。18世紀後半～19世紀前半の土器類が出土している。

井戸 1（図版1・4の2）

調査区中央東部で井戸10を切って成立している。内径0.9m程の花崗岩の切り石を用いた円形の石組がある。底部の標高は35.65mほどである。堆積土より19世紀中頃の遺物が出土している。

井戸 4（図版1・4の2）

調査区中央西部にあり井戸63を切っている。内径1.0～1.1mの花崗岩の切り石を用いた円形の石組を持ち、標高36.6m以下は径0.9m程の桶状の円形木枠が設置され、底部の標高は35.75mである。井筒内には多量の煉瓦が投棄されており埋没は近代に入ってからと思われる。

IV. 遺 物

出土遺物は整理箱にして33箱ある。時代は桃山時代以降が圧倒的に多く、ついで室町後期の遺物群があり、平安時代の9世紀から10世紀代のものが少量出土している。平安時代後期から室町時代前半にかけての遺物はほとんど出土していない。平安時代以前の遺物としては7世紀代くらいと思われる須恵器杯H身の破片が2点ほど出土している。

なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。^{註1}

土壤 133 出土土器（図版7、図7）

土師器の皿A（1）、同甕（2）、白色土器皿（3・4）、緑釉陶器椀（5・6）、灰釉陶器椀（7）が出土する。2の内面は粗いナデ、外面にはうっすらと煤が付着する。白色土器皿（3・4）は、削り出し高台。緑釉陶器椀（5・6）の胎土は須恵質で、外面はケズリ、高台は貼り付けである。5の内面には三叉トチンの痕跡が残る。6は釉がほとんど剥落している。産地は両者ともに近江産の可能性が考えられるが検討の余地もある。京都Ⅲ期の幅に収まる土器群と考えられる。

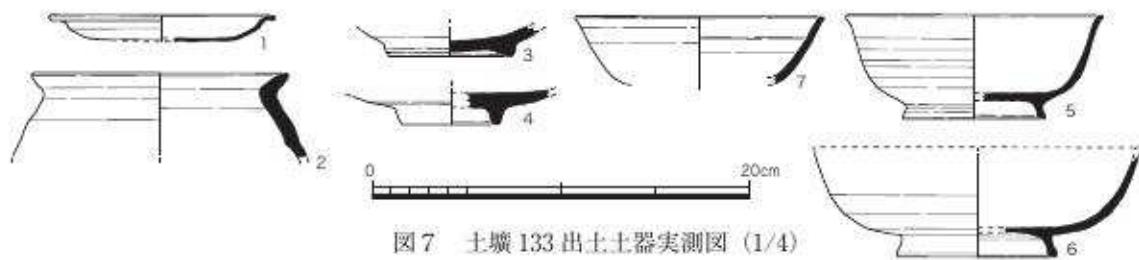


図7 土壌133出土土器実測図(1/4)

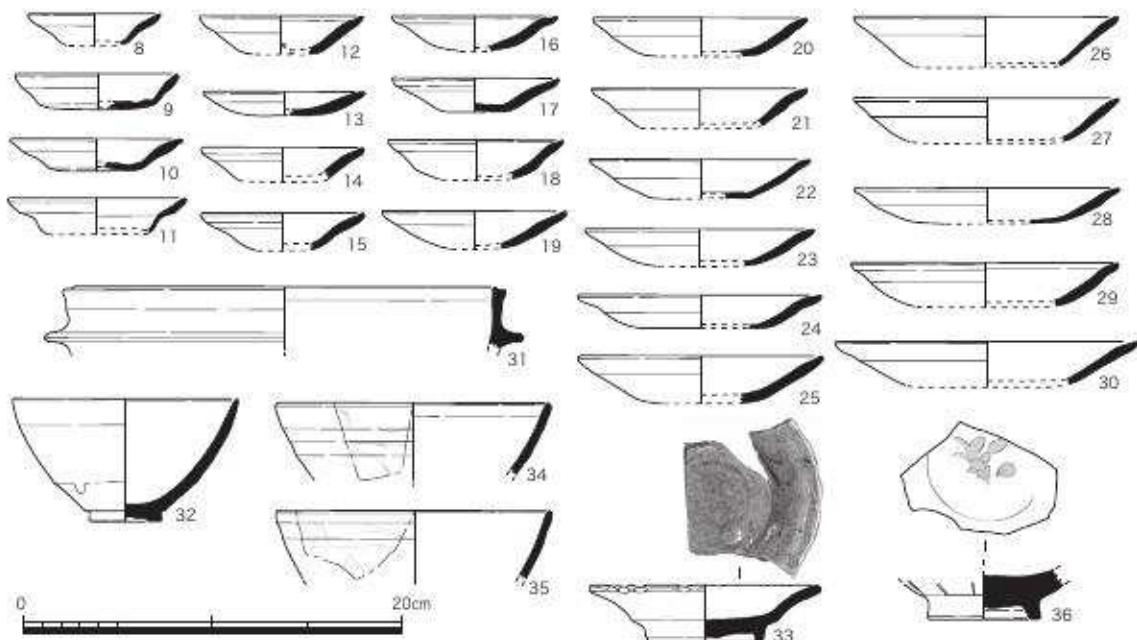


図8 堀32出土土器実測図(1/4)

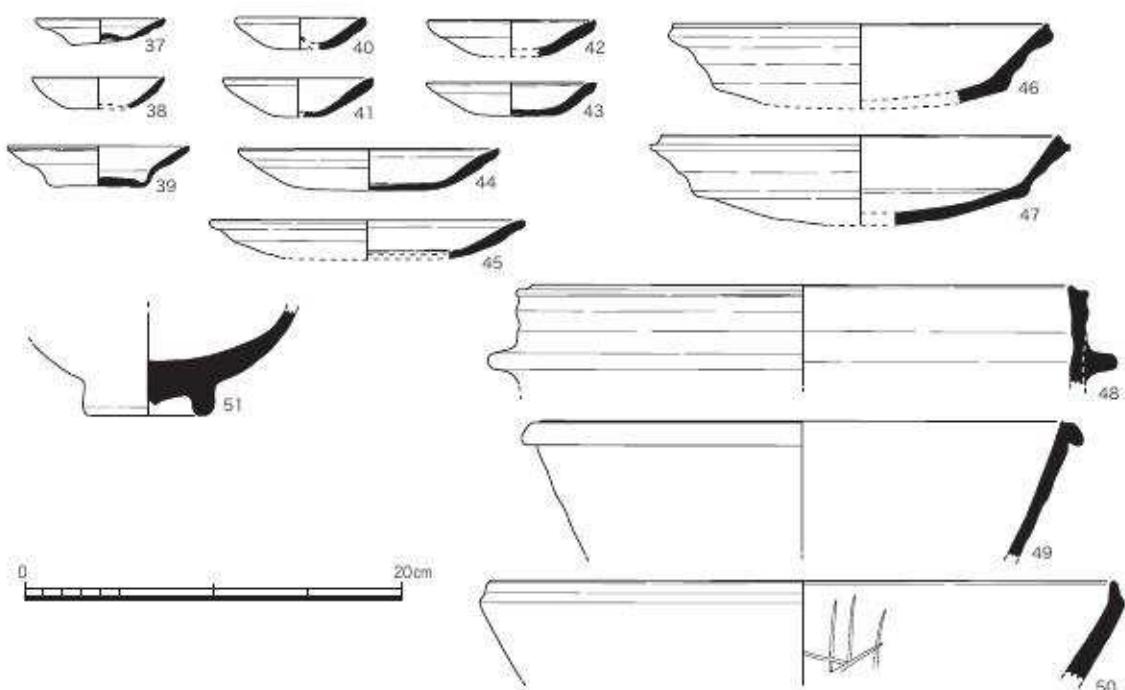


図9 土壌47出土土器実測図(1/4)

堀 32 出土土器（図版 7、図 8）

土師器皿 N (8 ~ 11)、同皿 Sh (12)、同皿 Sb (13 ~ 19)、同皿 S (20 ~ 30)、瓦器羽釜 (31)、美濃瀬戸系天目椀 (32)、輸入陶磁器青磁皿 (33)、同青磁椀 (34 ~ 36) がある。この他衛前産の擂鉢等も出土している。土師器皿 N では小型のものが 7cm、大きなものが 9cm 前後の口径に分布する。12 は皿 Sh としたが検討の余地がある。口径は 8.7cm 程である。13 も皿 Sb としたが特殊な形態のものである。皿 Sb は口径 8.6 ~ 9.8cm、皿 S は 10.2 ~ 12.1cm、12.9 ~ 13.0cm、14.0 ~ 14.2cm、15.9cm とそれぞれの分布ピークがある。32 は内面から体部外面下半にかけて鉄釉を施す。33 は口縁を輪花とし、体部内面には蓮弁文などを施す。34・35 は口縁外面にくずれた雷文、体部外面にはヘラ先で蓮弁文を施す。36 は見込に陰刻の花紋、体部外面には蓮弁文を施す。京都 X 期中には収まる土器群と考えている。

土壙 47 出土土器（図版 7、図 9）

土師器皿 N (37 ~ 39)、同皿 Sh (40)、同皿 Sb (41 ~ 43)、同皿 S (44・45)、瓦器盤 (46・47)、同羽釜 (48)、同鍋 (49)、焼締陶器擂鉢 (50)、輸入陶器青磁椀 (51) などが出た。土師器皿 N は小さいものが口径 6.7 ~ 7.0cm、大きいものが 9.6cm を測る。皿 Sh (40) は口径 7.0cm、皿 Sb (41 ~ 43) は 8.0 ~ 9.0cm、皿 S は 13.8cm と 16.7cm がある。46・47 は瓦器で口縁の作りは 48 の羽釜と共通するものがあり、おそらく生産地、生産集団は同じ所であろう。内面は粗いハケメ、体部外面は指押えの痕跡が残る。49 は蓋受け部分がかなり萎縮した状態のものであり、京城でよく出土する瓦器鍋の最終形態ものと言える。50 は丹波産の擂鉢と思われる。51 は内面に花紋などを施しているようであるが釉が厚い上、残存状況が悪く詳細は不明である。京都 X 期中の幅には収まる土器群と考えている。

井戸 10 出土土器（図版 8、図 10）

土師器皿 Nr (52 ~ 56)、同皿 Sb (57 ~ 60)、同皿 S (61 ~ 69)、同小壺 (70)、同鉢 (71)、同焙烙鍋 (72)、瓦器火鉢 (73)、唐津皿 (74 ~ 77)、同椀 (78)、同壺 (79)、瀬戸美濃系陶器志野皿 (80)、同天目茶椀 (81・82)、焼締陶器擂鉢 (83・84)、輸入陶磁器染付椀 (85 ~ 87) が出土している。土師器皿の口径分布は、皿 Nr は口径 5.2 ~ 6.0cm、皿 Sb は 9.0 ~ 10.0cm、皿 S は 10.2 ~ 10.4cm、11.1 ~ 11.6cm、さらに 13.1cm と 14.2cm とがある。58・61 ~ 63、66・67 には灯芯痕が残る。焙烙 (72) の外面には薄く煤が付着する。瓦器火鉢 (73) は胎土は 10YR6/2 灰黄褐色で、外面はよく磨かれていて炭素が吸着する。唐津系陶器の皿 (74) は胎土は 2.5Y6/1 黄灰色、釉は 7.5Y5/2 灰オリーブ色、同皿 (75) は胎土が 5Y7/1 灰白色、釉は 7.5Y7/1 灰白色、同皿 (76) は胎土が 7.5YR6/3 にぶい褐色、釉も同色で胎土の色を反映する。同皿 (77) の見込部分には三叉トチンの痕跡が認められ、胎土は 5YR6/4 にぶい橙色、釉は 2.5Y5/3 黄褐色である。椀 (78) は釉はほぼ透明で全体で 2.5Y7/1 灰白色の発色となっている。壺 (79) は胎土が 2.5Y6/2 灰黄色、釉は 5Y5/2 灰オリーブ色の発色である。体部外面には鉄を使って文様を付ける。瀬戸美濃系の陶器は胎土は 2.5Y8/2 灰白色で、80 は長石釉、81・82 は鉄釉が施される。擂鉢 (83・84) は丹波産と考えられる。器表は 5YR4/1 褐灰色を呈する。京都 XI 期中の幅には収まる土器群

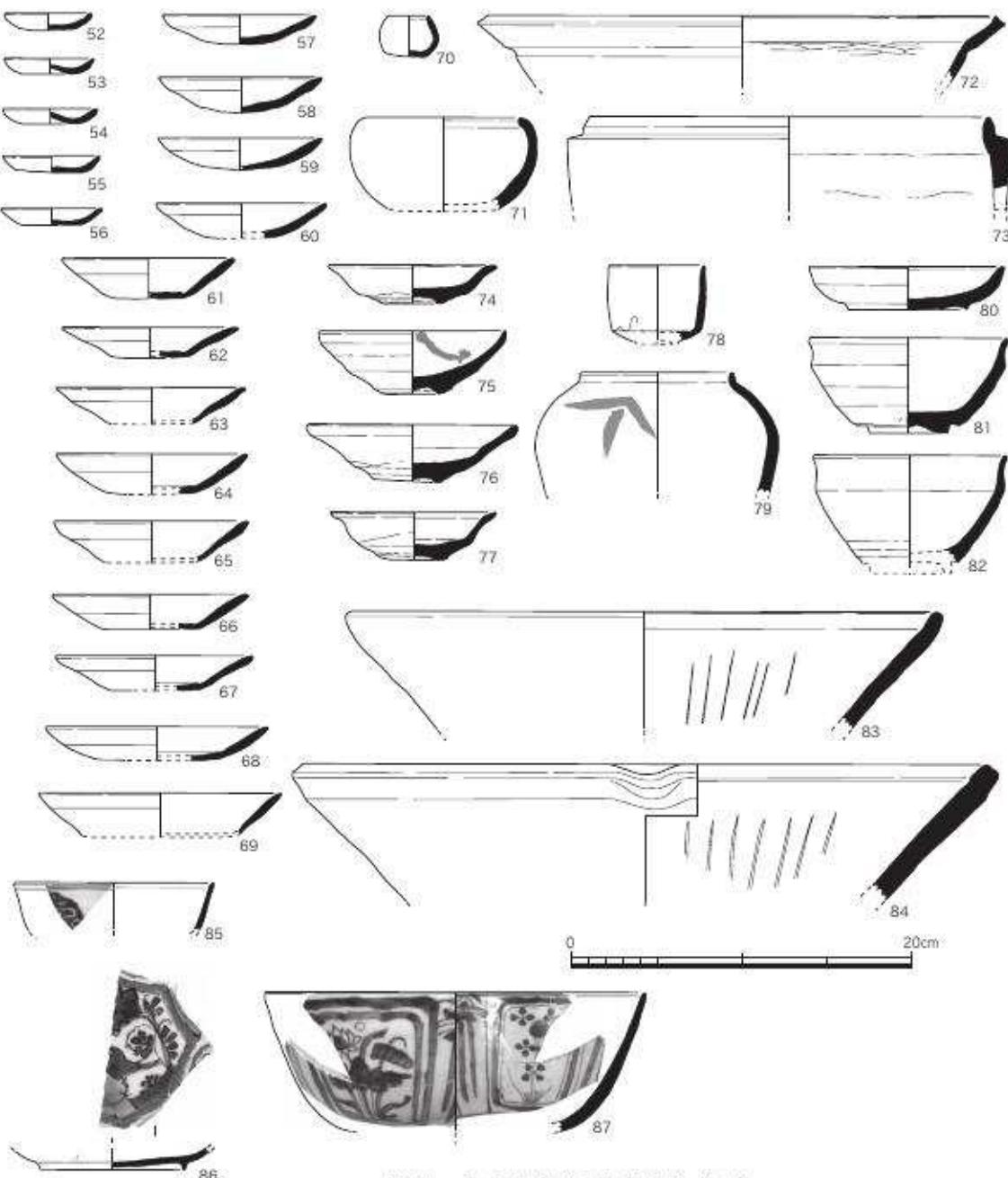


図 10 井戸 10 出土土器実測図 (1/4)

と見てている。

井戸 2 出土土器 (図版 8、図 11)

土師器皿 Nr (88・89)、同皿 Sb (90～92)、同皿 S (93～97)、同小壺 (98)、美濃瀬戸系の陶器、志野鉄絵皿 (99)、志野菊皿 (100)、天目茶椀 (101・102)、唐津系陶器椀 (103)、焼締陶器擂鉢 (104) がある。土師器皿 Nr は口径 6.0cm、皿 Sb は 9.0～9.8cm、皿 S は 10.5～12.0cm 幅で分布する。91・94・96 には灯芯痕が残り、95 の底部外面には板状の圧痕が認められる。瀬戸美濃系の陶器の胎土は一様に 2.5Y8/2 灰白色を呈する。99 の釉はほぼ透明のためこの胎土の色を反映した発色となっている。鉄絵は 7.5YR4/2 灰褐色に発色する。天目茶椀 (101・102) には鉄釉が施される。唐津系陶器椀 (103) は胎土が 10YR7/2 に近い黄橙色～2.5Y6/1 黄灰色、釉は 5Y5/3 灰オリー

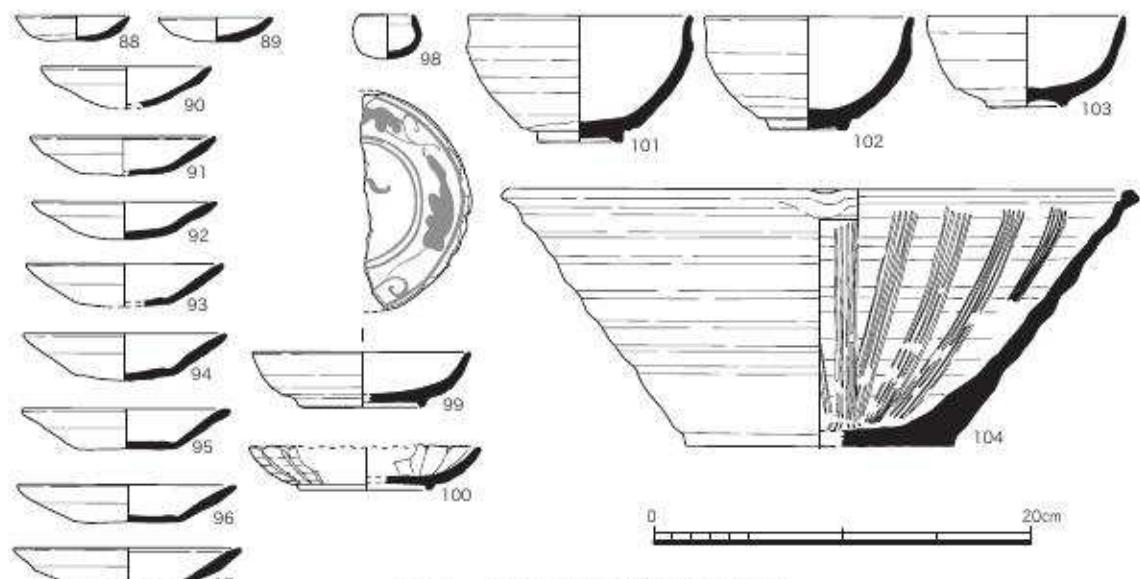


図11 井戸2出土土器実測図 (1/4)

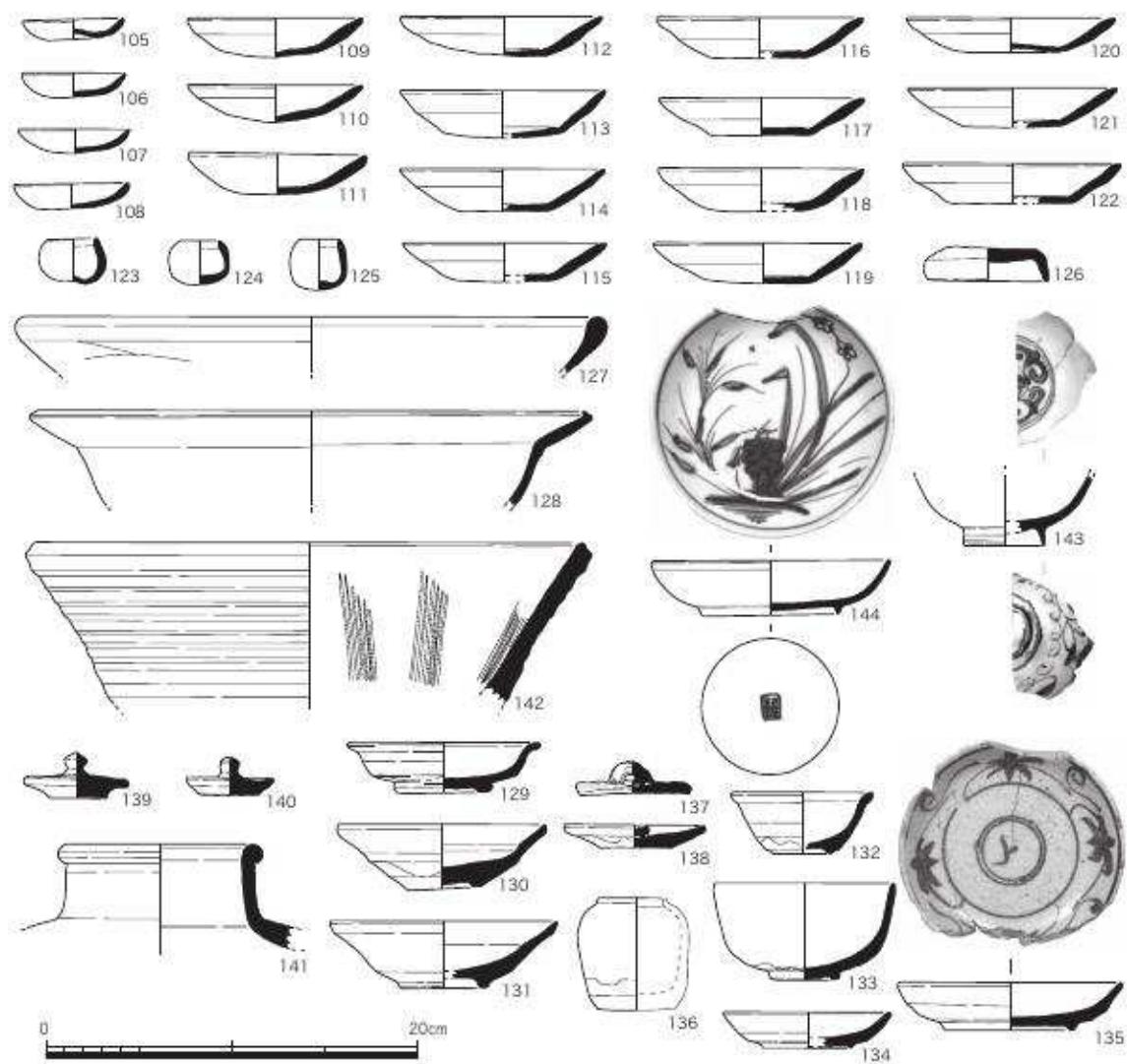


図12 井戸49出土土器実測図 (1/4)

ブ色に発色する。焼締陶器擂鉢（104）は信楽産で片口が付く。胎土は2.5Y6/1 黄灰色、器表は5YR4/3 にぶい赤褐色を呈する。京都XI期中の幅には収まるかと見ている。

井戸 49 出土土器（図版8、図12）

土師器皿 Nr (105～108)、同皿 Sb (109～111)、同皿 S (112～122)、同小壺 (123～125)、同塙壺蓋 (126)、同焙烙鍋 (127・128)、唐津系陶器皿 (129～131)、瀬戸美濃系陶器椀 (132・133)、同皿 (134・135)、同茶入 (136)、同茶入蓋 (137・138)、焼締陶器茶入蓋 (139・140)、同壺 (141)、同擂鉢 (142)、輸入陶磁器染付椀 (143)、同皿 (144) 等が出土している。土師器皿 Nr は口径 5.4～6.2cm、皿 Sb は 9.4～9.6cm、皿 S は 10.9～11.7cm の幅で分布する。土師器皿 (109～115、120・121) は灯明皿に使用した痕跡が残る。唐津系陶器皿は胎土が10YR7/1 灰白色から10YR7/2 にぶい黄橙色を呈し、釉は129が5Y6/2 灰オリーブ色、130が2.5Y7/2 灰黄色、131が5Y7/1 灰白色を呈す。瀬戸美濃系陶器類の胎土は2.5Y8/2 灰白色を呈する。132・133・135は長石釉が施され、135は内面に鉄で文様を施す。鉄絵は7.5YR4/2 灰褐色に発色する。134は灰釉が施され5Y7/3 浅黄色を呈する。茶入 (136) は内面から胴部外面下半まで鉄釉が施され7.5YR5/4 にぶい褐色に発色する。底部外面は糸切り痕を残す。茶入蓋 (137・138) は底部(天井部)にいづれも糸切り痕がある。137は外面に緑色の織部釉が、138には5Y7/2 灰白色の灰釉が施される。焼締陶器茶入蓋 (139・140) はいづれも備前産で、底部(天井部)には糸切り痕が認められる。色調は5YR4/3 にぶい赤褐色から7.5YR4/2 灰褐色を呈す。同壺 (141) は信楽産と推定される。胎土は5YR6/6 橙色である。同擂鉢 (142) も信楽産と見られ、胎土は2.5Y4/1 黄灰色、器表は7.5YR3/3 暗褐色である。京都XI期中の幅には収まるかと見ている。

金属製品

錢貨（図13）

出土錢貨には皇宋通宝 (145・160)、熙寧元宝 (146・156)、元豊通宝 (147・157・161)、永樂通宝 (148・149・151)、聖宋元宝 (150)、咸平元宝 (152)、祥符通宝 (153)、治平元宝 (154・155)、開禧通宝 (158)、洪武通宝 (159)、元祐通宝 (162) 等がある。145～149は堀32中層、150・151は土壙47、152～159は井戸10、160～162は井戸49より出土している。初鋤はそれぞれ皇宋通宝1039年、熙寧元宝1068年、元豊通宝1078年、永樂通宝1408年、聖宋元宝1101年、咸平元宝998年、祥符通宝1008年、治平元宝1064年、開禧通宝1201年、洪武通宝1368年、元祐通宝1086年となっている。

磬（図14）

183は土壙47より出土した銅磬である。完存しており絃13.0cm、肩間12.4cm、博5.5cm、股入2.7cm、厚さ0.9cm、量目は262gである。

遺物番号	量目(g)	厚さ(mm)
145	284	1.26
146	398	1.55
147	299	1.16
148	253	1.13
149	358	1.55
150	382	1.57
151	311	1.41
152	272	1.28
153	310	1.32
154	425	1.62
155	394	1.41
156	325	1.47
157	362	1.52
158	266	1.16
159	158	1.19
160	335	1.34
161	255	1.22
162	316	1.17

錢貨量目、厚さ一覧表

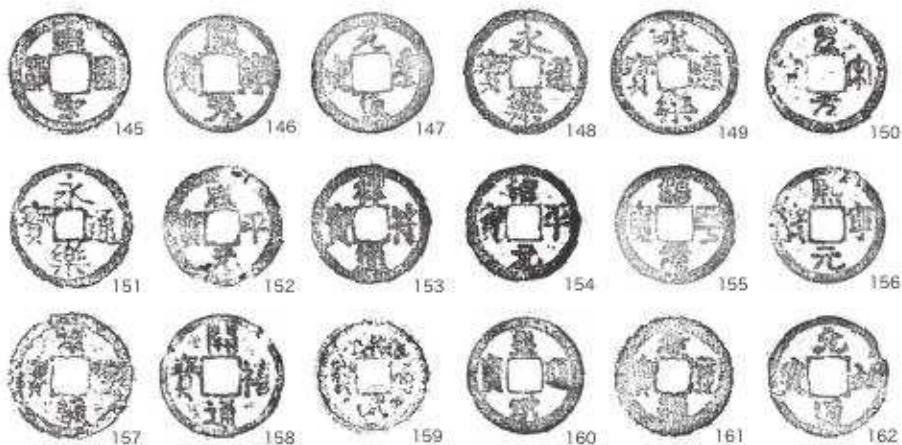


図13 出土錢貨拓影 (1/1.5)

0 5cm

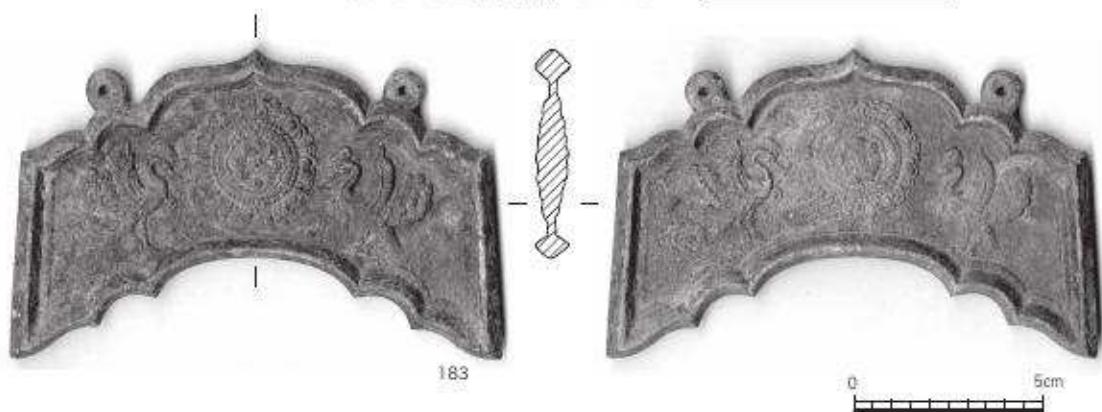


図14 土壙47出土磬写真・断面実測図 (1/2)

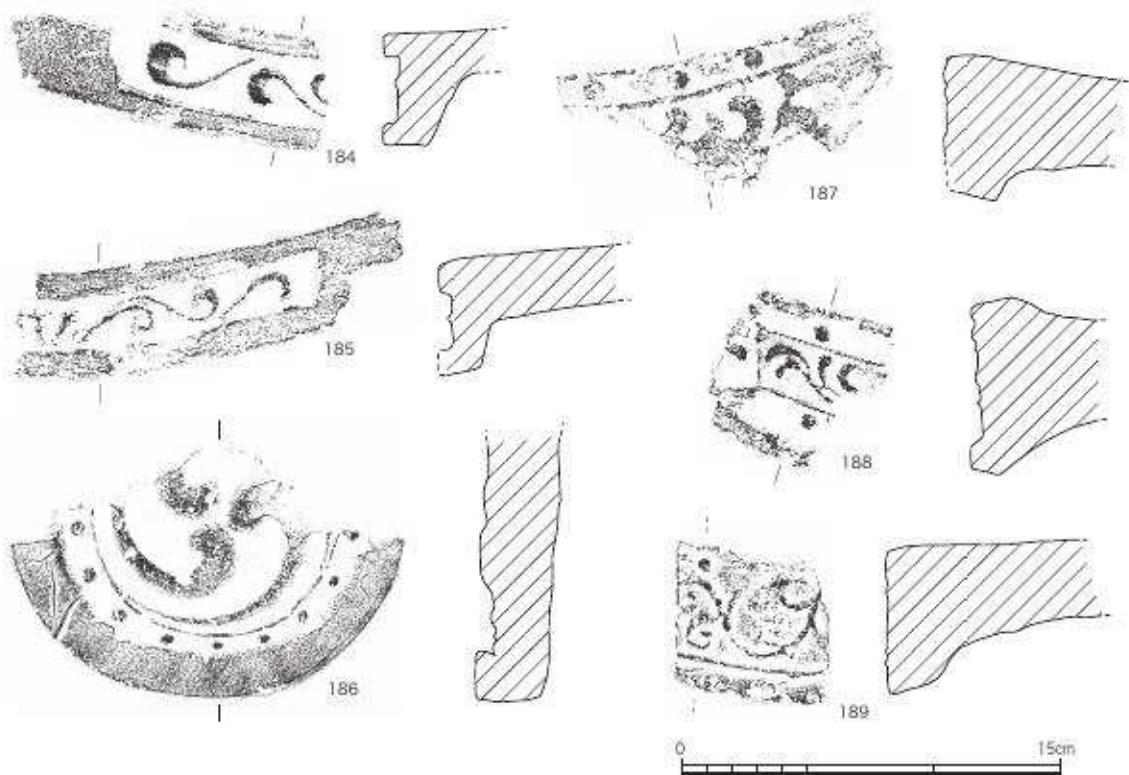


図15 出土軒瓦拓影・実測図 (1/3)

0 15cm

瓦²。中央の撞座には胡桃式復弁蓮華文を施し、両わきに相対した孔雀文を配する。裏面にも同様の文様配置を行う。共伴した土器群は室町末期のものであるが、文様・形態から見て14世紀半ば頃に製作されたものであろう。

瓦類（図15）

唐草文軒平瓦（184・185）

184は井戸63、185は土壙24出土。井戸63は18世紀、土壙24は17世紀代の遺構である。胎土は184が2.5Y7/1灰白色、185が2.5Y8/1灰白色を呈し器表は炭素がよく吸着する。古手の混入遺物としての出土と見ている。

巴文軒丸瓦（186）

18世紀後半～19世紀前半の土壙6より出土する。胎土は5Y6/1灰色で器表は炭素が吸着する。古手の混入遺物としての出土と見ている。

唐草文軒平瓦（187～189）

187・188は江戸時代前半の井戸49、189は16世紀代の堀32より出土。いずれも平安時代後期の瓦と見られ、これらも混入品としての出土となっている。187は胎土が2.5Y8/2灰白色で、器表は7.5YR7/3にぶい橙色とやや赤みがあり被熱している可能性がある。188は胎土がN5/0灰色で器表もほぼ同色である。189は胎土が5Y7/1灰白色で器表の炭素吸着はむらがある。

V. 小 結

「東三条殿」は、西隣の「閑院」、更に西の「堀川院」と南北二町を占有した著名な邸宅群の一つである。幾度かの火災にも見舞われそのつど再建されたが、憲仁親王（後の高倉天皇）の東宮御所として用いられていた仁安元（1166）年に焼失、以後は再建されることとなかった。今回の調査では平安時代の遺構としては井戸や土壙、柱穴等を確認することが出来た。特色としては調査区東側の町尻小路の西側築地に近い部分で検出されたということで、調査区西側では平安時代の遺構は確認されていない。邸宅の敷地内ではあるが南東部分の隅という事情が反映しているものと見ている。

調査区を二分して斜めに検出した堀32は出土遺物から「天文法華の乱」（1532～1536年）の頃のものであると考えている。法華宗は、当時勢いのあった一向一揆に対し山科本願寺を焼き打ちし一向宗との対立が激化。さらに比叡山延暦寺との宗論に端を発し、山門側が天文五年七月に六角定頼の援軍を得て、本国寺などを焼き打ちし法華宗側は敗走、下京は焼土と化し、上京も約三分の一が炎上した。当時、法華寺院は城塞化しており妙覚寺、妙顯寺等も例外ではなく、緊張の高まりとともに、寺院と下京を取り巻く堀が掘られたことは洛中洛外図等にも描かれている。今回検出したこの堀も水を湛え、妙覺寺から南西方向に延び、下京の北西部分の護りを固めるためのものであることは明らかである。「鹿苑日録」天文五年五月二十九日の条に「六角早鐘、用(要)害の溝を掘ると云々」という記事が現実みを帯びた事柄として伝わってくる。乱の後、埋め戻さ

れ、整備され桃山から江戸時代には井戸等が成立する。土壤47より出土した銅磬は妙覚寺関連の遺物である可能性も考えられる。

左京三条三坊二町の南東の一部の様子が明らかとなった。とりわけ町衆の発展と深くかかわってきた法華宗と本願寺あるいは山門との歴史的な事件の一端を遺構に見ることができ、意義深い調査となった。

註1 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」「研究紀要第3号」(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

註2 廣瀬都興「日本銅磬の研究」清閑社 1943年 この用例に従う。

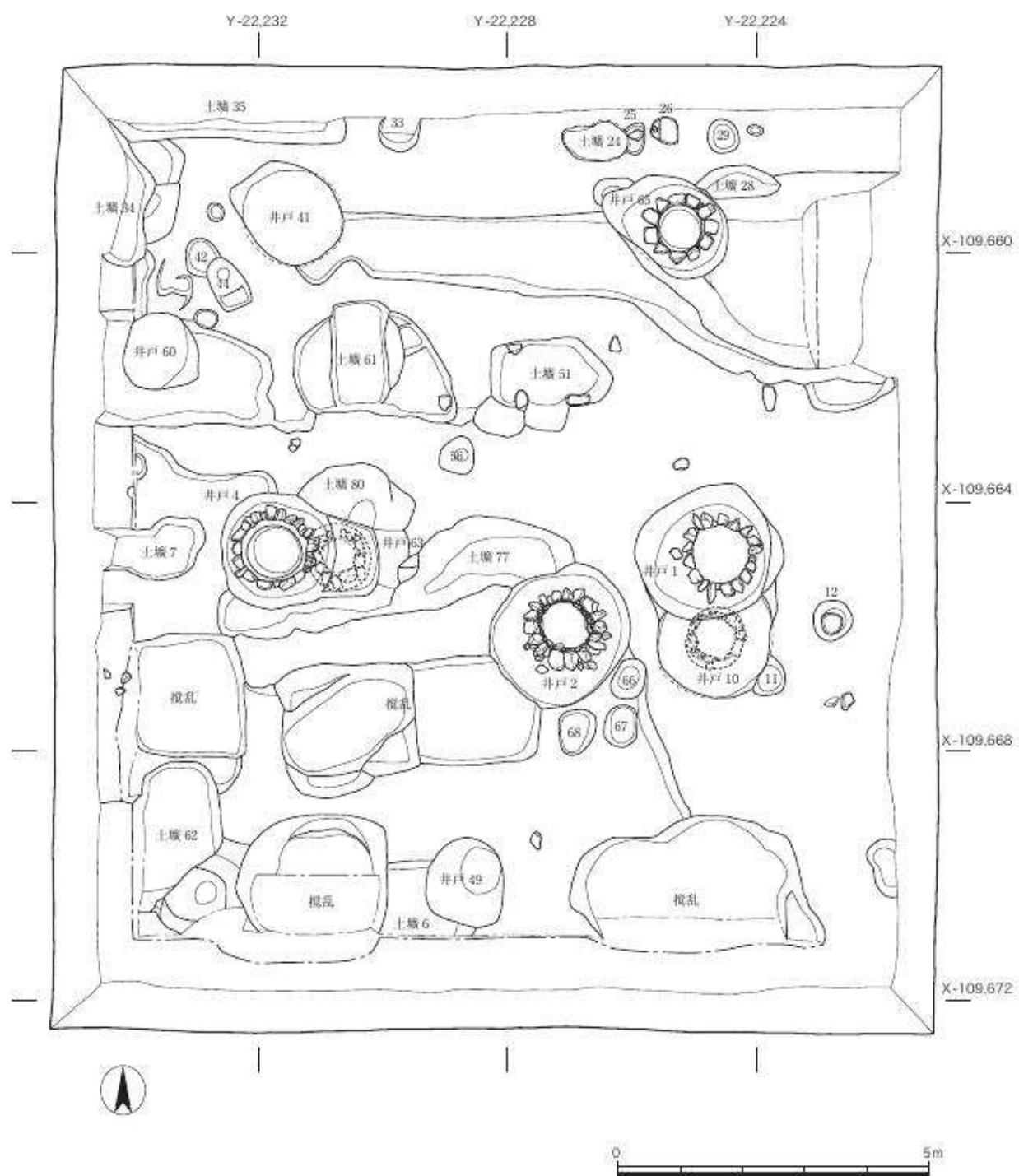
註3 註2に掲載されている第76図「建武四年(?)孔雀文磬」としているものと類似する。

註4 高橋康夫・吉田伸之・官本雅明・伊藤毅「国集日本都市史」(財) 東京大学出版会 1993年

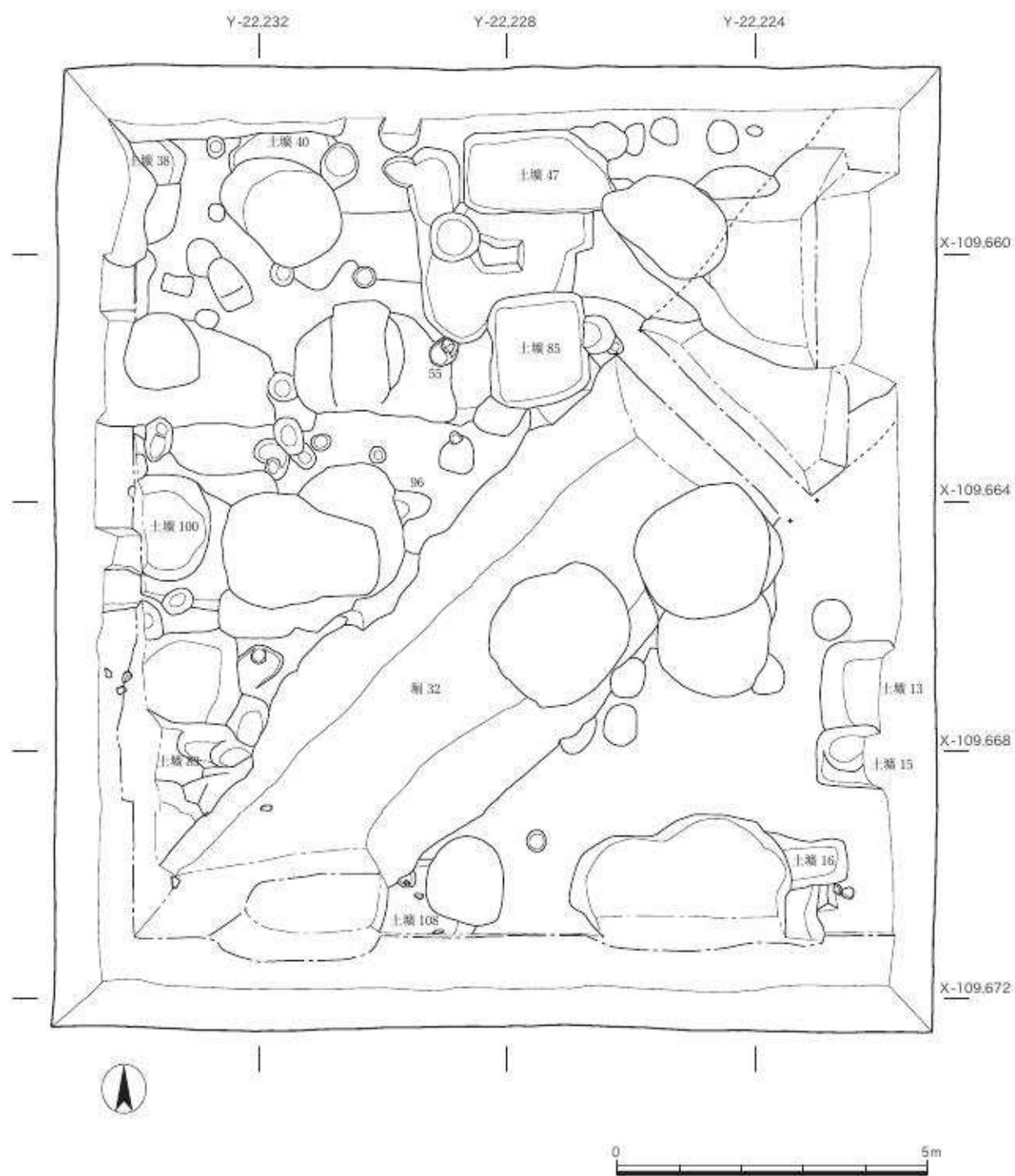
報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうにちょう・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡							
副書名	東三条殿							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒 658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地 125-1404							
発行年月日	2009年11月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京左京 三条三坊 二町・烏丸 御池遺跡	京都市中京区 なかのまち 中之町 51 他	市町村	遺跡番号	35 度 00 分 40 秒	135 度 45 分 23 秒	2009.07.06 ～ 2009.09.01	221 m ²	マンション 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 三条三坊 二町 (東三条殿) 烏丸御池遺跡	都城跡	平安時代～江戸時代	土壙、柱穴、堀 井戸	土師器皿、須恵器、 緑釉陶器、灰釉陶器、 黒色土器、瓦器、焼 締陶器、国産施釉陶器、 瓦類、銅磬、錢貨	室町時代後半、 天文法華の乱に伴う堀跡			

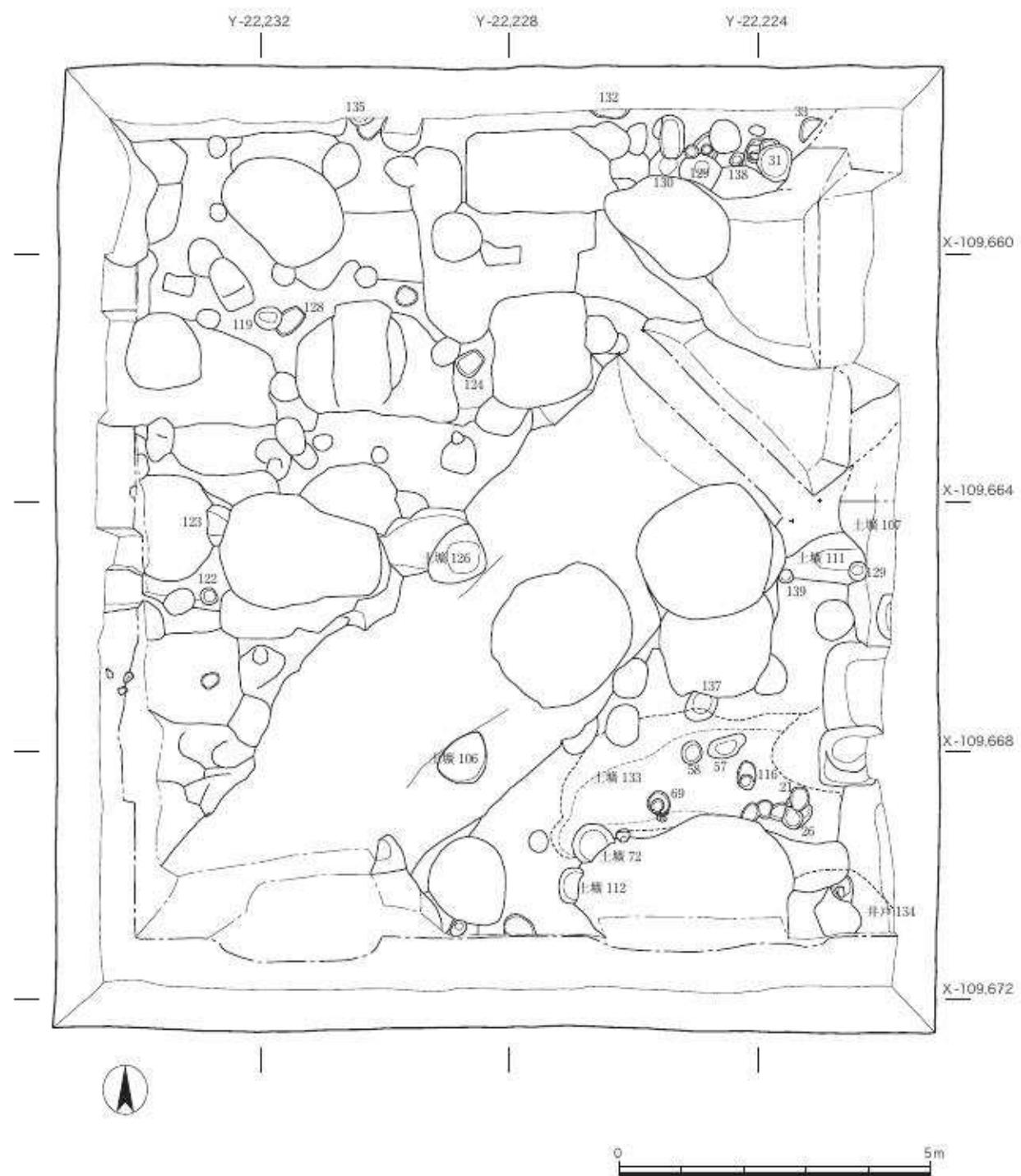
図 版



第1面遺構実測図 (1/100)



第2面遺構実測図 (1/100)



第3面遺構実測図 (1/100)



1 調査地近景（南西から）



2 第1面全景（南西から）



1 第2面全景（南西から）



2 第3面全景（南西から）



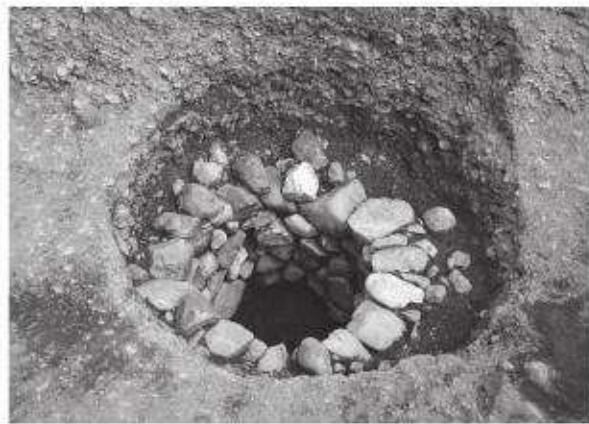
1 土壙 133 (南から)



2 柱穴 31・33・138 (南東から)



3 堀 32 セクション (南西から)



4 井戸 2 (西から)



5 井戸 10 (南から)



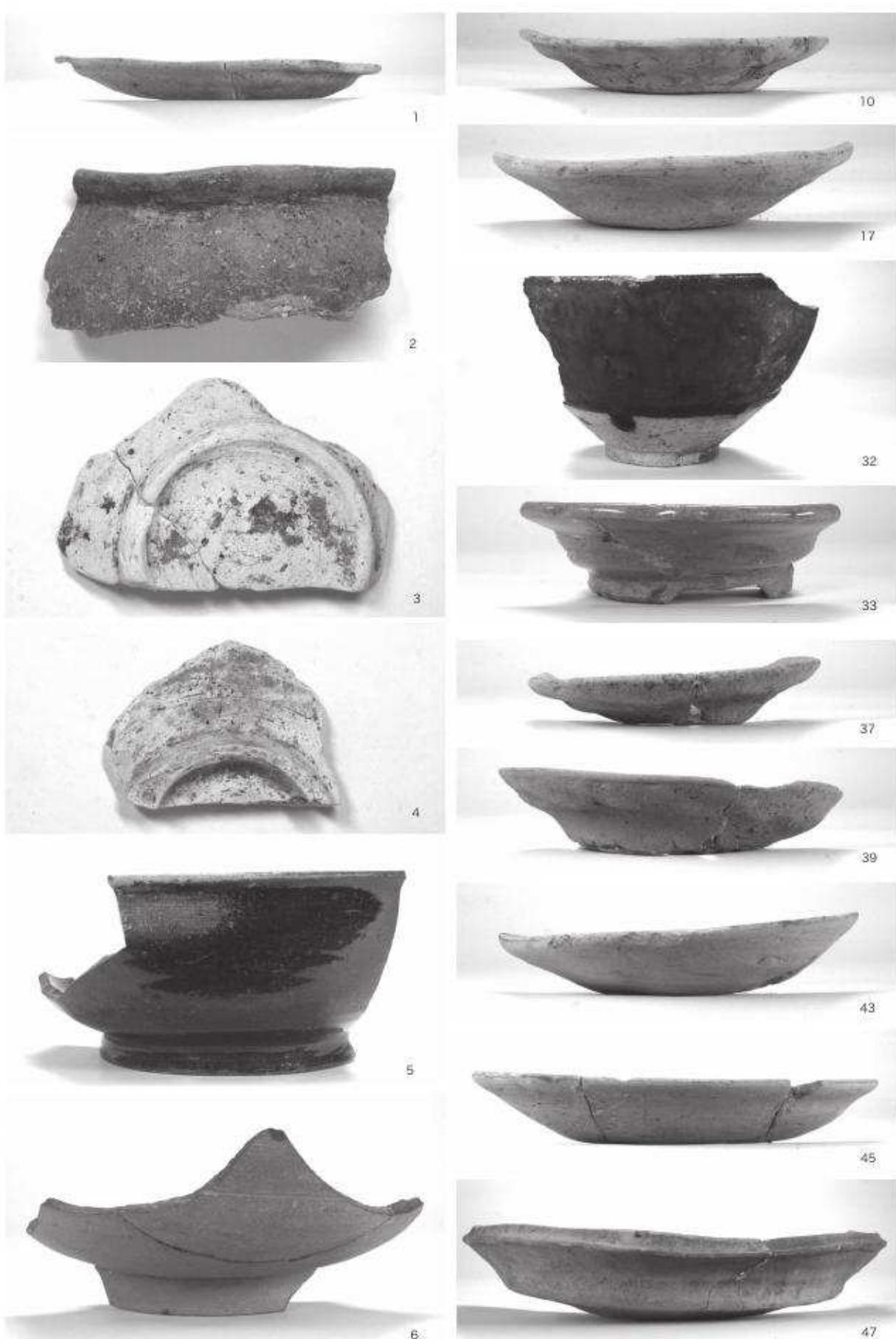
6 井戸 49 (南から)



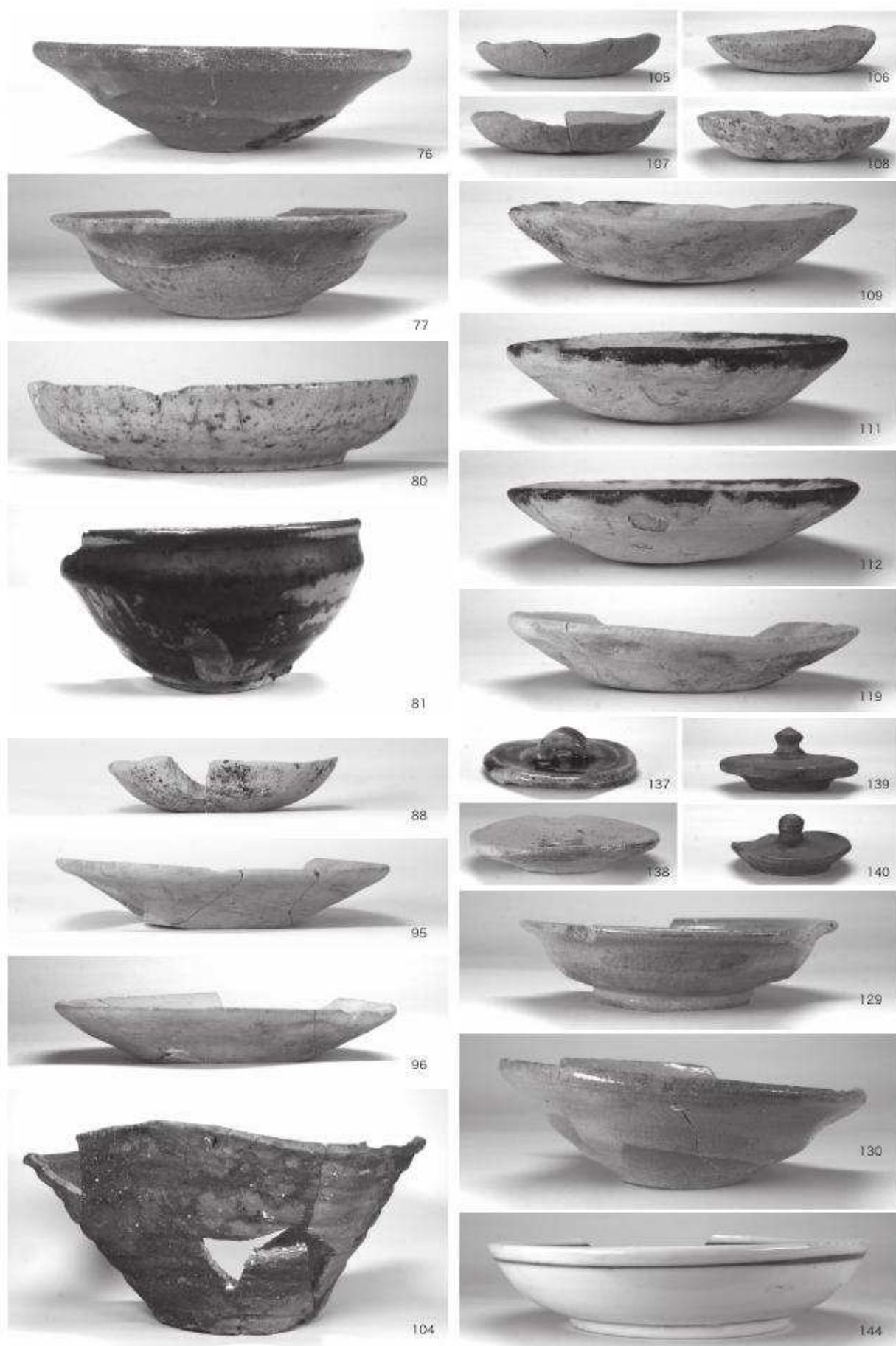
7 井戸 63 (東から)



8 井戸 65 (南から)



土壤 133 (1 ~ 6) · 堀 32 (10 · 17 · 32 · 33) · 土壌 47 (37 · 39 · 43 · 45 · 47) 出土遺物



井戸 10 (76・77・80・81)・井戸 2 (88・95・96・104)
井戸 49 (105～109・111・112・119・129・130・137～140・144) 出土遺物

平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡

—東三条殿—

発行日 2009年11月30日

編集
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078) 857-6368

印刷 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075) 315-6034

